

はじめに

とても恐ろしかった新型コロナウイルスによるパンデミックの記憶が、今では、はるか昔の出来事のように思える。2020年のある日、倒れて意識を失っている状態で発見され、救急外来に搬送された患者から、ウイルスが検出されたことがあった。陽性の情報を伝える電話が救急外来に入ったとたん、大きなよめきが起これ救急フロアはパニックになった。ただし、今からみると、その患者から排出されていたウイルスはごく少量であった。しかし現在では、ウイルスの排出量の多い救急患者に対しても、感染防護が十分といえない装備でスタッフが平気で対応している。

世の中も、緊急事態宣言がなされていた頃の記憶は、すでに遠く過去のものとなりつつある。そんな状況で、なぜ、いまさら新型コロナウイルスの感染拡大を題材とした書籍を発刊するのだという疑問があるかもしれない。

人間は、長い歴史の中で、何度も新たな感染症の脅威に直面し、なんとか乗り越えてきた。人間にとって新しい病原体としての新型コロナウイルスに世界が直面した出来事も、歴史の一部となる段階を迎えつつある。東大寺に大仏が建立された背景には、天然痘のパンデミックがあったといわれている。100年前のインフルエンザのパンデミックについても、犠牲者を悼む石仏が特定の地域にあることを本書では言及している。今回のパンデミックに関して、その歴史を継承する伝承物はあるだろうか。本書は決してこうした仏像に匹敵するような伝承物ではない。しかし、今だからこそ、パンデミックの記憶とともに、その中で、市井で医療に関わる人々がどのように感じ、いかに考え、いかに闘ったかを、記録する意味があるのではないかという考えで構成されたものである。

平出 敦

序章

新型コロナパンデミックの記憶・・・
隠れたヒーローたち

「今度のことは、ヒロイズムなどという
問題じゃないんです。

これは誠実さの問題なんです。
こんな考え方はあるいは笑われるかも
しれませんが、しかしペストと戦う唯一の
方法は、誠実さということです。」

(アルペール・カミュ著、宮崎 嶺雄 訳、ペスト、新潮社、1969、P245)

P245)



なぜ隠れたヒーローか？

この物語は、2019年に中国の武漢からはじまり、世界的にパンデミックに発展したCOVID-19による感染拡大に対して、医療従事者がどのように戦ったか、隠れたヒーローたちのエピソードをとりまとめた記録である。

このパンデミックは、平和な世界に入り込み、人々の日常生活まで大きな影響を与えたが、特に医療に携わる者にとっては、公私ともに激震にさらされた日々となった。診療の最前線で戦った医師や看護師たちの壮絶な記録は、印象深いものであり後世に残す記録としても貴重であるがすでに数多く出版されている^{1,2)}。また、その実態をフィクションとして、あぶり出した物語も、現実を反映した「記録」として、我々に貴重な情報を残してくれている³⁻⁵⁾。

パンデミックの一時期には、人々が巣ごもりをする中で、最前線で働く医療従事者に対して感染の媒介者であるかのような差別があった。と同時に、感謝の意をあらわそうというキャンペーンも世界的に行われた。たとえば、夜の特定の時刻に一斉にライトアップをしたり、食べ物を扱う業者が医療施設に差し入れをしたりといった取り組みである。

ただし、すべての医療従事者が、ウイルスとの戦いの最前線で忙殺されたわけではなく、過酷な現実に常に苛まれたわけではない。医療機関の中には、特定の大学から派遣された医師たちがこの感染症患者の診療を拒否したりした例もあるが、そうでなくても結果的に立場上、新型コロナウイルスとは距離のある立場で診療していた医療従事者は少なくない。

日本医療労働組合連合会は、新型コロナウイルス感染症に関する緊急実態調査を、折節に実施して調査結果を公開してきた⁶⁾。その中で、新型コロナウイルスと向き合う医療現場からは、感染拡大のごく最初の時点で

ある2020年度早々のまとめでも、すでにかなり切羽詰まった内容の訴えが寄せられている⁷⁾。当初から、最前線は逼迫していたことは明らかである。この頃の訴えは、一部の医療機関の悲鳴であったが、緊急実態調査を重ねるに従って、医療施設だけでなく介護施設等にも逼迫が広がっていくプロセスを垣間見ることができる。たとえば、この頃には、クルーズ客船であるダイヤモンド・プリンセス号での陽性患者の受け入れに伴う影響を受けた医療機関からの訴えがいくつも見られる。「ダイヤモンド・プリンセス号での陽性患者を受け入れることとなったB病院には、系列病院から医師、看護師など応援スタッフを1週間交代で送ったが、送り出した施設では、戻ったスタッフに対し二次感染を防ぐための2週間の自宅待機が必要となり、各施設で業務に支障をきたした」といった訴えである。しかし、ダイヤモンド・プリンセス号による感染拡大が明らかとなった当初は、一般の医療従事者にとって新型コロナウイルスは、まだまだ遠い存在であることは確かだった。また、その後、3年間に様々な様相を呈しながら波状に感染拡大が進んでも、新型コロナウイルス感染症の診療には、直接、濃厚には関連しなかった医療従事者の方が多かったのである。

この記録は、最前線ではなく、むしろ後方の医療機関で働く医療従事者であったり、感染症診療に直接には関与しない部門であったり、薬局の薬剤師であったり、医療教育に携わる教育担当者であったり、診療ではなく救急搬送の立場から関わる者であったりした人々が、どのようにこのパンデミックにかかわったかを残すために作成されたものである。凄惨な戦いの場の真っ只中ではなく、凄惨な戦いの場の後方や側方から、自分たちの身の丈や状況の中で可能な支援をした方々を、「隠れたヒーロー」として記録にとりあげた。中には、結果的に「主役」に近い、活躍をした人たちもいるし、壮絶な思いを秘めている人もいる。が、あくまでその立場は、少し

でも新型コロナウイルス感染拡大において、一定の役割を担うための活動であり、本人からみて、ヒーローになろうと思って行ったことではない。本書はその時点で、何とかして役割を果たそうと目指した内容を明らかにして記録しようとしたものである。

新型コロナウイルスの感染拡大が現実となった2020年には、1947年に発刊されたアルベール・カミュの「ペスト」が改めて見直され、行方の不透明な不安に押しつぶされそうな多くの人々に、勇気を与えてくれ評判となった⁸⁾。まさに「隠れたベストセラー」となった書籍である。この作品では、ペストによって封鎖されたアルジェリアのオランという町で医療に関わる人々が登場する。彼らは、オランの市民として生きている。カミュはペストの感染拡大の中で、個々の登場人物が何を目指し、何を支えとして役割を果たそうとしたかを赤裸々に描いている。本書は、新型コロナウイルスのパンデミックの中で、医療従事者たちが、何に関わり、どのように役割を果たそうとしたかを、インタビューをもとに再構築した記録である。従って、単に医療の現場での混乱や壮絶さを描いたものでもない。

文献

1. 特定非営利活動法人 地域医療・介護研究会JAPAN (著), 株式会社 ヘルステア・システム研究所 (著). 新型コロナウイルスとの闘い 現場医師120日の記録. PHPエディターズ・グループ, 東京, 2020.
2. 日本看護協会出版会編集部 (編), ナースたちの現場レポート. 日本看護協会出版会, 2021.
3. Michael Lewis. The premonition. W W Norton & Co Inc. New Yor. 2021. 中山 宥 (訳) 最悪の予感: パンデミックとの戦い. 早川書房, 東京, 2021.
4. 夏川草介. 臨床の砦. 小学館, 東京, 2022.
5. 夏川草介. レッドゾーン. 小学館, 東京, 2022.
6. 日本医療労働組合連合会. 各種調査結果. その他.
<http://irouren.or.jp/research/etc/>
7. 「新型コロナ」と向き合う医療現場の訴え. 2020年4月7日/
日本医療労働組合連合会
<http://irouren.or.jp/research/84a5336c8b19e7014861633e415342106f3d46c7.pdf>
8. Albert Camus. La Peste. Gallimard, Paris, 1947.

この章の冒頭で引用した

アルベール・カミュ著「ペスト」(新潮社, P245)の場面について

「ペスト」に登場する最も重要な人物の一人は、医師リウーである。医師リウーの一貫した生き方は、周囲の人たちを「感化」していく。そのプロセスはこの小説を味わう時の醍醐味のひとつでもある。そして、コロナ禍で不安に押しつぶされそうになる我々に、どのようにこの災禍の中で役割を果たしていくべきかの手がかりを与えてくれた。

引用した冒頭の発言は、たまたまパリからオランの町に取材に来て、ペストのため思わぬ足止めをかうことになった新聞記者レイモン・ランベールの不躰な問いかけに、医師ベルナル・リウーが答えた言葉である。ランベールはオランに滞在を続けるうちにリウーと接点をもつようになった。しかし、黙々と働き続けるリウーの行動のモチベーションを理解できない。リウーが「ヒロイズム」を意識して、つまりヒーローになろうと思って行動しているのかと、自分の疑問をリウー自身にぶつけた。その問いかけに答えたリウーの言葉である。

「今度のことは、ヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題なんです。」



マスクをした地蔵
2020年4月 京都市山科区にて

第1章

感染拡大のはじまり・・・

日本中を震撼させたクルーズ船

「どういうことです。誠実さってというのは?」と、急に真剣な顔つきになって、ランベールはいった。

「一般にはどういうことかしりませんがね。しかし、僕の場合には、つまり自分の職務を果たすことだと心得ています」

「ああ、まったく」と、ランベールは狂おしくつぶやいた。

(アルベール・カミュ著. 宮崎 嶺雄 訳. ペスト. 新潮社, 1969, P245)